Münich 378^c 写本の著者・題名の確定

——『時代の鏡』諸写本との比較から——

Determination of the Title and Author of the
MS München 378^c; Through comparison with MSS of
*Mir'āt al-Zamān*橋 爪 烈^{*}
HASHIZUME Retsu

ABSTRACT In this paper I deal with an unidentified manuscript held in the Bayerische Staatsbibliothek, München 378^c, which is a chronicle covering 402~436H, namely the latter part of the Buwayhid dynasty. This manuscript preserves the content of the chronicle of Hilāl al-Ṣābī, almost all of which has been lost, and has therefore been used in the study of Buwayhid history. Because it is an unidentified manuscript, its value as a source is diminished. In this paper I was able to determine the author and title of München 378^c, and in that process it became clear that there is a problem of the manuscript line of *Mir'āt al-Zamān*, and then I tried to organize this problem to.

In 1905 Amedroz examined München 378^c by comparing it with the manuscript of *Mir'āt al-Zamān* Or. 4619, but he came to no conclusion about the relationship. First, I reexamined his work, and I demonstrated the reason why he did not conclude that München 378^c is a manuscript of *Mir'āt al-Zamān*. Because, Or. 4619 is different from München 378^c with respect to contents and the number of articles.

Second, I compared München 378^c with manuscripts of *Mir'āt al-Zamān* preserved in libraries of Istanbul, for example the libraries of Ahmet III and Köprülü. München 378^c and the manuscripts of *Mir'āt al-Zamān* in Istanbul turned out to belong the same line of manuscripts. Namely, München 378^c is *Mir'āt al-Zamān*, and the author is Sibṭ b. al-Jawzī.

Finally, in this paper I showed that *Mir'āt al-Zamān* has two lines of manuscripts. Although this fact has been pointed out by Cl. Cahen and Li Guo, I demonstrated that problem of manuscript lines of *Mir'āt al-Zamān* is more complicated than heretofore realized.

* 東京大学大学院博士課程
Ph. D Student, The University of Tokyo

I. はじめに

これまでブワイフ朝史、及び10世紀中葉から末にかけてのイラクを中心とした地域の政治史や制度史を研究するにあたっては、ミスカワイフ Miskawayh 著 *Tajārib al-Umam*『諸民族の経験』とルーズラーワリー al-Rūdhrawārī 著の *Dhayl Tajārib al-Umam*『諸民族の経験補遺』及びヒラルル Hilāl al-Ṣabī の歴史書『歴史』の断片が主に利用されてきた。しかし、*Tajārib al-Umam* はヒジュラ暦372/西暦982-3年で記述が終わり、*Dhayl Tajārib al-Umam* は369/979-980~389/999年、そしてヒラルルの歴史書に至っては389/998-999~393/1002-03年の記述が現存しているに過ぎず、ブワイフ朝後期からセルジューク朝初期、つまり11世紀を通して、同時代史料が欠落している状態であった。

さて、筆者がMünich 378^c 写本（以下 Münich 写本⁽²⁾）の存在を初めて知ったのは、カピールの研究書を手に取ったときであった。彼は、ブワイフ朝後期の諸々の出来事について言及する際にこの Münich 写本を主要な典拠としているのであるが、書名及び著者不明の Münich 写本を、散逸したヒラルルの年代記の記述に基づいたものとして、使用している⁽³⁾のである。書名及び著者は不明であるが、同写本の記述の典拠が明らかであるため、使用にあたっての問題はないということであろう。

Münich 写本は402/1011-12~436/1044-45年の記事を収録しており、ブワイフ朝後半期の大部分をカバーしている。そのため同写本の著者・題名が判明すれば、ブワイフ朝史研究や11世紀前半のイスラーム史を研究する上で、有益な同時代史料、あるいは同時代史料の内容を保存した史料を提供することが可能になる⁽⁴⁾。

次に、ブッセのブワイフ朝研究書を見ると、やはりこの写本に関する情報が参考文献欄に記載されている。彼は Münich 写本をスィプト Sibṭ b. al-Jawzī 著の年代記 *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rikh al-A'yān*『貴顕たちの歴史における時代の鏡』（以下 *Mir'āt*）としており、その根拠としてアメドロツの論文を挙げている⁽⁵⁾。

そこでアメドロツの該当論文を見ると、Münich 写本についての解説がなされており、彼はその記述内容から、スィプト著の年代記 *Mir'āt* である可能性が高いことを指摘している⁽⁶⁾。しかし、彼は、同論文を執筆していた段階では大英博物館所蔵（現大英図書館）の *Mir'āt* 写本 Or. 4619（以下 Or. 4619写本⁽⁷⁾）しか参照できず、また Münich 写本中のイブン・アルジャウズィー Ibn al-Jawzī の著作が引用されている箇所、イブン・アルジャウズィーが「著者」スィプトの祖父であるならば挿入したであろう「我が祖父 *jaddī*」という文言が記されていないことを理由に、スィプトの著作であると断言するには至っていない⁽⁸⁾。

本稿では、アメドロツの史料確定作業を受け継ぎ、Münich 写本の著者及び題名の確定

を試みる。また、確定作業の過程で使用した *Mir'at* の諸写本の特徴などについても若干の指摘を行う。

II. 「アメドロツの考察」検証

さて、アメドロツの考察を順に追ってみよう。まず彼は München 写本 f. 135b の13行目から始まる記述に注目している。そこには、

qāla al-muṣannif—Raḥima-hu Allāh—ilā hāhunā intahat al-muṭāla‘a wa al-intiqā’
min ta’rikh Hilāl b. al-Muḥassin al-Ṣābī min nuskha fī waqf al-Malik al-Ashraf—
Raḥima-hu Allāh—.....

著者——神が彼に慈悲を与えますように！——曰く、「これにて、アルマリク・アル
アシュラフ——神が彼に慈悲を与えますように！——のワクフ物に属すヒラル・
ブン・アルムハッスィン・アッサービーの歴史書の写しからの調査と摘要は終わる」

とあり、「著者」がアイユーブ朝君主アルマリク・アルアシュラフ（ダマスクス統治 在位
626/1229～635/1237年）のワクフとして寄進されたヒラルの『歴史』の調査と摘要をこ
の年（434H 年）の条で終えることが記述されている。ここから München 写本が、現在は
散逸したヒラルの歴史書に基づいて記述されたことが判明する⁽⁹⁾。また、アルマリク・
アルアシュラフのワクフという文言から、少なくとも626/1228-29年以降に執筆されたこ
とも判明し、「著者」を特定する年代の範囲が狭まることになる。また f. 28a にある記述
から、「著者」が644/1246-47年にバグダードにあって、カリフのワズィールから直接話を
聞いた人物であることも分かる。そしてアメドロツは核心へと至る。まず f. 138b の

qāla al-muṣannif—Raḥima-hu Allāh—thumma dhakara jaddī min hādihā al-jins
fuṣūlan wa ajāba ‘an-hā wa qāla fī ākhir al-ajwiba idhā lam tastaḥī fa-ṣna’ mā
shi’ta.

著者——神が彼に慈悲を与えますように！——曰く、「その後、我が祖父はこの種の
事例に関して数章を割いて述べ、それ等の問題に答えている。そしてその答えの最
後で、『もし恥を恥と思わないのであれば、望むがままに振舞えばよからう』と言っ
ている。」

という記述の「我が祖父 *jaddī*」という部分に注目する。この一文はシャリーフ・アルム
ルタダー al-Sharīf al-Murtaḍā の死亡録に含まれるものである。アメドロツはここから

Kashf al-Zunūn『疑惑の溶解』を引用し、この「我が祖父」をイブン・アルジャウズィーとするのである。そして、祖父が判明すると、必然的に「著者」はその孫スィフトとい(10)
うことになり、Münich 写本は *Mir'āt* ということになる。(11)

しかし、彼は f. 60b の

qāla al-shaykh Abū al-Faraj al-Jawzī—Raḥima-hu Allāh—fi *Kitāb al-Mawḍū'āt*.....
師アブー・アルファラジュ・アルジャウズィー——神が彼に慈悲を与えますように
！——は『様々な主題の書』の中で…中略…と言っている。

という一文に注目する。この文には「我が祖父」の文言が記されていない。「著者」がスィフトであるならば、祖父イブン・アルジャウズィーの発言や著作からの引用には必ず「我が祖父」と記述するはずである、との判断から、アメドロツは著者・題名ともに断定を避けている。なお彼は、参照した Or. 4619 写本には Münich 写本 f. 60b の該当部分の記述がなく確認が取れなかったと述べている。(12)

以上がアメドロツによる Münich 写本の考察である。彼の抱えていた問題は、比較する *Mir'āt* の写本が大英図書館所蔵の Or. 4619 写本のみであったこと、及び Or. 4619 写本自体にあった。そこで以下では、彼の抱えていた問題を解決する形で、Münich 写本の確定作業を進める。

III. Or. 4619 写本との比較

果たして Münich 写本はスィフト著の *Mir'āt* なのだろうか。これを明らかにするには、Münich 写本の記述範囲と重なる *Mir'āt* の諸写本を比較検討する必要があるが、現在筆者の手元には Münich 写本以外に 5 種類の写本のコピーがある。(13)

本章ではアメドロツが唯一参照できた Or. 4619 写本と Münich 写本を比較検討する。まず Or. 4619 写本の特徴を挙げると、「典拠の明記」がある。記述内容や年毎によって差はあるものの、「著者」が参照した作者名やその著作名が数多く記されている。筆者が参照した他の写本群では、典拠が明記されていない場合がほとんどで、いかなる史料に基づいて記述しているのか不明な記事が多いが、Or. 4619 写本を見ればその典拠がわかるため、その点で同写本は有益な情報をもたらしているといえよう。

さて明記された典拠の中に、イブン・アルジャウズィーも含まれている。確認できた限りでは、Or. 4619 写本においてイブン・アルジャウズィーからの引用であることを示す箇所は計30箇所あり、ほとんどの場合「我が祖父が *al-Muntazam* で述べたところによると、云々」とか「我が祖父が *al-Muntazam* の中で言うには、云々」となっている。アブー・

アルファラジュ Abū al-Faraj とカイブン・アルジャウズィーという形で典拠が明記されている箇所は、Or. 4619 写本には存在しない。従って、Münich 写本 f. 60b で「我が祖父」の文言が記されていないことを理由にアメドロツが判断を保留したことは妥当と言えるだろう。また、彼の指摘するとおり、Münich 写本 f. 60b にある、イブン・アルジャウズィー著 *Kitāb al-Mawḍūʿāt* の内容を引用する箇所は、Or. 4619 写本では欠落しており比較検討することは出来なかった。さらに、前述の Münich 写本 f. 138b の該当箇所の記述も Or. 4619 写本には存在しないことも判明した。これでは判断を保留せざるを得ないだろう。

次に、Münich 写本と Or. 4619 写本を比較すると、収録記事の内容、長さにおいて違いが見られる。例えば、402H 年の条の記述を Münich 写本と比較すると（表 1 参照）、最初の内容こそ

al-sana al-thāniya wa arba' mi'a fi-hā fi yawm 'Āshūrā adhina Fakhr al-Mulk li-ahl al-Karkh bi al-nawḥ wa ta'ṭil al-aswāq wa labs al-musūḥ wa mā jarat bi-hi al-'āda

402H 年 この年のアーシューラー祭の日、ファフル・アルムルクはカルフ地区の住民に対し、嘆くこと、スークを閉じること、粗衣を身にまとうこと、そして習慣となっていることを許可した。

とアーシューラー祭に関してファフル・アルムルクがカルフ地区の住民に様々な祭事等を許可したという記事で、両写本とも全く同じ文章であるが、その後 Münich 写本では、

wa naẓara Fakhr al-Mulk fi iqtā'āt al-'asākir fa-amḍā-hā wa ṭayyaba qulūbahum wa sāra ilā Awānā wa ma'a-hu al-'asākir al-Daylam wa al-Shirāziya wa al-'Irāqiya wa al-A'rāb wa al-Akrād wa ghayr-him yurīdu al-Mawṣil wa banī 'Uqayl fa jā'at bi-rusul-him bi-mā yurīdu fa raja'a ilā Baghdād
Dhikr al-Maḥḍar alladhī baraza min diwān al-Qādir fi al-qadhī fi ansāb al-Miṣriyina.....

そして、ファフル・アルムルクは諸軍団のイクターを調査し、それら（の所有）を追認し、軍人たちの心を惹きつけた。そして、ファフル・アルムルクは、モースル市及びウカイル部族（の征服）を望んでアワーナーに向かった。彼と共にダイラムの諸軍団やシーラーズ軍団、イラーク軍団、遊牧アラブたち、クルド軍団、その他の者たちがいた。すると、ウカイル部族の使者が、ファフル・アルムルクの望む

ものと共にやって来た。そこで、彼はバグダードに戻った。

アルカーディルのディーワーンより発せられたミスルの人々の血統を非難する公式見解についての記述

とブワイフ朝イラク総督ファフル・アルムルク Fakhr al-Mulk のイクター管理業務やウカイル族討伐のための出撃に関する記事が書かれ、その後カリフ・カーディルによって発布された「ファーティマ朝カリフの血統を否定する文書」の紹介へと続いていくのに対し、Or. 4619 写本では、

wa fi shahr Rajab wa Sha'bān wa Ramaḍān wāṣala Fakhr al-Mulk li-Ṣadaqāt
wa ḥamala al-māl ilā maqābir Quraysh wa al-Ḥijāz wa al-Kūfa wa farraqa
al-thiyāb wa al-ḥinṭa wa al-tamar wa al-darāhim wa danānir yawm al-Īd fi
al-fuqarā' wa al-masākīn

ラジャブ月、シャバーン月、そしてラマダーン月において、ファフル・アルムルクは諸々のサダカを支払い、クライシュ墓地やヒジャーズ地方、或いはクーファに金銭を運び、イード（・アルフィトル）に際して衣類、小麦、ナツメヤシの実、ディルハム銀貨、ディーナール金貨を、貧乏人たちに分配した。

と、そのファフル・アルムルクによって、クライシュ族の墓地やヒジャーズ地方、あるいはクーファへのサダカに基づく金銭と小麦などの食料の送付についての記事が続く。この記事は、Münich 写本では f. 1b の 17 行目から始まるのだが、要するに Or. 4619 写本では、「ファーティマ朝カリフの血統を否定する文書」の記事が完全に削除されているのである。このように内容において、両写本は重なる部分とそうでない部分が存在する。また、単純に 1 年間の記事の長さで比べても、Or. 4619 写本は Münich 写本よりも短く、平均すると 3 分の 1 長さになる。⁽¹⁴⁾

以上のように、Or. 4619 写本との比較検討だけでは Münich 写本の書名及び著者を明らかにするのは不十分であるということが言えるだろう。

IV. Or. 4619 写本以外の *Mir'āt* 諸写本との比較検討

当時アメドロツは Or. 4619 写本しか参照できなかったため、その判断を保留した。そこで本章では、Or. 4619 写本以外の *Mir'āt* の写本を参照し、Münich 写本との比較検討を行う。本章で扱う写本はイスタンブルのトプカプ宮殿博物館図書館 Ahmet 分類に属す写本（以下 Ahmet/b-11, Ahmet/b-12, Ahmet/d-17 ⁽¹⁵⁾ 写本）及びキョプリュリュ

Köprülüzâde 図書館所蔵の写本（以下 Köprülüzâde⁽¹⁶⁾ 写本）である。

Münich 写本の開始年である 402H 年の記事を 4 写本間（Münich 写本 ff. 1a-8a, Ahmet/b-11 写本 ff. 268b-275a, Ahmet/d-17 写本 ff. 11b-20a, Köprülüzâde 写本 pp. 329-340）で比べると（表 I 参照），その記事内容も記事の量も全く同じである。もちろん，文字の追加や欠落あるいは異なる単語を使用している場合も若干見受けられるが，この 4 写本は同一系統に属す写本と見なすことが可能だろう⁽¹⁷⁾。そして，スィフトの著作 *Mir'at* とされている 3 写本（Ahmet/b-11 写本，Ahmet/d-17 写本，Köprülüzâde 写本）と同一系統であるということになると，Münich 写本が *Mir'at* である可能性は当然高くなる。

さらに，アメドロツの判断を保留させた原因である Münich 写本 fol. 60b のイブン・アルジャウズィーに対する「我が祖父」という文言挿入についての問題を，Ahmet/d-17 写本及び Köprülüzâde 写本で確認すると，まず Ahmet/d-17 写本では

qāla al-shaykh Abū al-Faraj al-Jawzī -Raḥīma-hu Allāh- fi *Kitāb al-Mawḍū'at*.....
師アブー・アルファラジュ・アルジャウズィー——神が彼に慈悲を与えますように！——は『様々な主題の書』の中で…中略…と言っている。

とあり，やはり「我が祖父」という文言は記されていない⁽¹⁹⁾。さらに Münich 写本 fol. 61b において，イブン・アルジャウズィーに対して「我が祖父」という文言を記していない箇所が 2 つあるが，やはり Ahmet/d-17 写本においても Münich 写本に対応する 2 箇所とも記されていない⁽²⁰⁾。Ahmet/b-12 写本は，al-Jawzī の前に [ibn] が挿入され，正しく記されている以外 Ahmet/d-17 写本と同じ文章である。また，イブン・アルジャウズィーに対して「我が祖父」という文言を使用していない点も同様である⁽²¹⁾。

Köprülüzâde 写本は，

qāla al-shaykh Abū al-Faraj al-Jawzī -Raḥīma-hu Allāh- fi Kitāb-hi *al-Mawḍū'at*.....
師アブー・アルファラジュ・アルジャウズィー——神が彼に慈悲を与えますように！——は彼の著作『様々な主題の書』の中で…中略…と言っている。

とあり，こちらもほぼ同様の文であり，やはり「我が祖父」の文言は記されていない⁽²²⁾。

次に Münich 写本 fol. 138b において Ibn al-Jawzī に対し「我が祖父 *jaddī*」という文言を記している点について他の写本で確認すると，Ahmet/b-12, Ahmet/d-17 写本⁽²³⁾，Köprülüzâde 写本ともに Münich 写本と同じく記している⁽²⁴⁾。

以上のことから，Münich 写本，Ahmet/b-11, 12 写本，Ahmet/d-17 写本，そして

Köprülüzāde 写本の4写本は、扱う年代範囲に違いはあるが、同系統の写本であることが確認された。⁽²⁵⁾すなわち München 写本の「著者」はスィプトであり、その題名は *Mir'āt* と断定できるのである。

V. *Mir'āt* 諸写本の持つ問題点

以上のようにアメドロツの示した疑問点を解明しつつ München 写本の題名及び著者名を明らかにした。しかしその作業を通じて別の問題点が浮かび上がってきた。それは同じく *Mir'āt* とされる Or. 4619 写本と Ahmet 系統写本の両系統の写本間で記述量や記述内容に差があるということである。ここで想起されるのが、「*Mir'āt* の写本は二種類存在し、両者の記述内容は大きく異なっている」というカーエンの指摘である。⁽²⁶⁾

彼によると、二種類存在する *Mir'āt* 写本の方の写本群は、(A) *Mir'āt* の補遺を著したユーニーニー al-Yūnīni によって編纂された *Mukhtaṣar Mir'āt al-Zamān*『時代の鏡縮約』というタイトルを持つ一群の写本及び単に *Mir'āt* とされている数点の写本群であり、もう一方は(B)スィプトの不完全な草稿を写した写本群ということである。そして、カーエンは(B)写本群をジェウェットによって出版されたファクシミリ版の基となった Landberg 136 写本、イスタンブールのワクフ博物館 Maḥaf al-Awqāf の写本群 (Evkaf 分類)、そしてトプカプ宮殿博物館図書館 Karaçelebizade 分類284写本とする。一方、(A)写本群は、Ahmet 2931 分類の3写本及び Ahmet 2907/a-d, h としている。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

次にカーエンの見解を踏襲するリ・グオの研究書を見ると、同書の208-211頁に *Mukhtaṣar Mir'āt al-Zamān* のリストが掲げられており、それによると、これまで *Mir'āt* とされてきた写本のうちの数点がユーニーニーによって編纂されたものであることが分かる。⁽³⁰⁾つまりそのリストには(A)写本群が具体的に示されているわけだが、Ahmet 2931 の3写本及び Ahmet 2907/a-c, h 写本は(A)写本群に含まれていない。またリ・グオの関心から、(B)写本群に属す *Mir'āt* 写本がどの写本に相当するかについては指摘がなされていない。⁽³¹⁾

カーエン、リ・グオともにユーニーニー著 *Dhayl Mir'āt al-Zamān* に現れる記述から、著者ユーニーニーがまずスィプトの *Mir'āt* の縮約版 (*Mukhtaṣar Mir'āt al-Zamān*) を作成し、その上で *Mir'āt* の補遺 *Dhayl Mir'āt al-Zamān* を著したと判断しているのである。⁽³²⁾また彼らはユーニーニー編 *Mir'āt* の写本中に、スィプトの死後に行われた明らかな加筆・削除があることも指摘している。⁽³³⁾

しかし、本稿で使用した Or. 4619 写本、Köprülüzāde 写本、München 写本を始め、本稿で扱った範囲 (402~436H 年) とは重ならないが、Bibliothèque Nationale 所蔵の *Mir'āt* 写本 No. 1505 (175~202H 年をカバー) 及び No. 1506 (440~517H 年をカバー)、

トルコ・イスラーム芸術博物館 Türk-İslâm Eserleri Müzesi 所蔵 No. 2141 (450～489H 年をカバー) 及び No. 2135 (Vol. XII, 459～560H 年をカバー), トプカプ宮殿博物館図書館 As'ad Affandi (Esat Effendi) 分類 No. 2141 (Vol. 20, 598～654H 年をカバー)⁽³⁴⁾, その他多くの写本などがリ・グオのリストに入っていない。さらにカーエンとリ・グオの間でも Ahmet 系統の諸写本に対する見解は食い違いを見せている。

従って, 例えば Or. 4619 写本は(B)写本群に属す写本なのかといった問題は改めて検討される必要がある。このように, *Mir'at* とされる諸写本に対してはいまだ包括的な研究がなされておらず, その性格付けがなされていない写本が数多く残されているというのが現状である。

V. お わ り に

本稿では, 著者・題名共に不詳の München 写本がスィフト著のイスラーム世界史 *Mir'at* であったことを明らかにし, その考察の過程で浮上した *Mir'at* 諸写本の性格に関する問題について, 若干の指摘を行った。ちょうど100年前, アメドロツは München 写本の存在を明らかにしたが, 彼は同写本を *Mir'at* ではないかと疑いつつも, 断定に踏み切れなかった。それは彼が参照した *Mir'at* とされる Or. 4619 写本が, 記述量やその形式などにおいて München 写本とは明らかに異なるものであったからである。

その後現在に至るまで *Mir'at* についての包括的な研究はなされておらず, 性格の異なる *Mir'at* の多くの写本がそれぞれどのような関係を有しているのか, 明らかにされずに残っていると見てよいだろう。カーエン, リ・グオ等の指摘は重要であるが, それでも現存する *Mir'at* 諸写本の一部についての性格を明らかにしたに過ぎない。今後は写本の作成や編纂に関わる事情, あるいはその記述形式, 内容などをさらに検討し, *Mir'at* の全容を解明する必要があるだろう。

注

- (1) 写本の内容や扱う範囲に関わる場合は西暦を省略し, 「402H 年」のようにヒジュラ暦のみ記述した。
- (2) No. 952, Cod. arab. 378^c. Cf. J. Aumer, *Verzeichniss der orientalischen Handschriften der K. Hof- und Staatsbibliothek in München mit ausschluss der Hebraeischen, Arabischen und Persischen: nebst Anhang zum verzeichniss der Arabischen und Persischen Handschriften*, Wiesbaden, 1970, 157-158. なお München 写本のコピーの入手にあたっては, 2003年当時ミュンヘン大学に留学中であった伊藤隆郎氏にご協力頂いた。
- (3) Kabir Mafizullah, *The Buwayhid dynasty of Baghdad (334/946-447/1055)*,

Calcutta, 1964, 221. 彼の研究書の参考文献欄には次のように書かれている。

Munich Manuscript: Munich 'Arab. 378c (Cat. no. 952, Supp. p137) a chronicle of events from 402 to 436 A. H. based on Hilāl's Ta'rīkh.

- (4) 本稿第I章冒頭の引用を参照のこと。カピールはこの記述から, Münich 写本がヒラルルの年代記に基づいて執筆されたとするが, ヒラルルの年代記の記述をどの程度反映しているのかは, 検討の余地がある。この問題に関しては稿を改める。
- (5) H. Busse, *Chalif und Grosskönig, die Buyiden im Iraq (945-1055)*, Beirut, 1969, 549. 参考文献欄には

Handschrift München 478 c, ohne Verfassernamen=Auszug aus Sibṭ Ibn al-Ġauzī: *Mir'āt az-zamān*, über die Jahre 403/1011-12 bis 436/1044-45. (Vgl. dazu Amedroz, *Dirhem of Khusru*, o. S. 354, Anm. 8.)

とあり, 写本番号及び写本の最初の年代が異なるが, カピールの使用したものと同一写本であることは明らかである。

- (6) H. F. Amedroz, "On a dirham of Khusru Shah of 361 A. H. etc.," *JRAS* 1905, 476 note 1.
- (7) Sibṭ, *Mir'āt*, British Library, Or. 4619. Cf. Ch. Rieu, *Supplement to the Catalogue of the Arabic Manuscripts in the British Museum*, London, 1894, 823-824; Sibṭ b. al-Jawzī, *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān: al-ḥiqba 345-447H*, ed. J. J. M. al-Hamūnādī, Baghdād, 1990, 90.
- (8) Amedroz, "On a dirham of Khusru Shah," 476. なお, アメドロツは1908年に校訂出版した *Dhayl Ta'rīkh Dimashq*『ダマスクス史補遺』の序文 3 頁注釈 2 及び 8 頁において, Münich 写本を *Mir'āt* として扱っているが, 同書の 5 頁ではザハビー Dhababī の *Ta'rīkh al-Islām*『イスラーム史』の写本であるとしており, その見解に混乱が見られる。ただし, *Ta'rīkh al-Islām* であるとする見解が単なる間違いであるとしても, 「Münich 写本は *Mir'āt* である」と判断することを保留する因となった問題点が解明されていないことに変わりはない。Ibn al-Qalānīsī, *Ta'rīkh Abī Ya'lā Ḥamza b. al-Qalānīsī al-ma'rūf bi-Dhayl Ta'rīkh Dimashq*, ed. H. F. Amedroz, Leyden, 1908, 2-8.
- (9) さらに「著者」は, ワクフとして寄進されたヒラルルの歴史書の写しについて, 434H 年以降 449H 年までの記述が欠落していること, そしてそれはヒラルルの息子 ガルス・アンニウマ Ghars al-Ni'ma の発言から判明すると述べている。もっとも, セビム A. Sevim の校訂本 (Sibṭ b. al-Jawzī, *Mir'āt al-Zamān fī Ta'rīkh al-A'yān: al-Ḥawādith al-Khāssa bi-Ta'rīkh al-Salājiqa bayna al-Sanawāt 1056-1086m*, ed. A. Sevim, Ankara, 1968) の 1 頁や 449H 年をカバーする別の写本を見ると, ヒラルルの歴史書は 449H 年ではなく 448H 年まで執筆されたということが, ガルス・アンニウマの発言によって判明し, またスィプト自身も 448H 年の死亡録にヒラルルの記事を収録しているため, 449H とあるのは, スィプトの勘違いであろう。ちなみに *Mir'āt* の 434~448H 年の記述は, 依拠する史料 (ヒラルルの『歴史』) を欠くためか, 他の

年代に比べて情報量が減っている。

- (10) アメドロツは、注釈のなかで *Kashf al-Zunūn* の引用箇所を (iii, 287, No. 5484) と示しているが、手元の *Kashf al-zunūn* バグダード版には No. が記されていないため、該当箇所を特定できなかった。ただ、引用文中の *idhā* 以下の文章（下線部分）は、Ibn al-Jawzī, *al-Muntazam fī Ta'rikh al-Mulūk wa al-Umam*, Vol. 8, Ḥaydarābād, 1356 H, 126 で確認でき、「我が祖父」をイブン・アルジャウズィーとするアメドロツの見解が裏付けられる。
- (11) スィプトの生没年は、581/1185 or 582/1186～654/1256 であり、先に示された626/1228-29年、644/1246-47年は共にその範囲に入ってくる。
- (12) Or. 4619 写本は、Münich 写本 f. 60b の内容（414H 年の条）を記していると思われる f. 212a の13行目から f. 213b の頁末まで、何らかの原因で空白となっており、比較することが出来ない。
- (13) これまでの調査で Münich 写本の記述範囲に重なる *Mir'āt* 諸写本は9点存在することが確認できたが、現段階で利用できたのは5点のみである。残りの写本の調査・利用に関しては今後の課題である。
- (14) Münich 写本の収録年代は 402～436H 年の34年間である。葉数138の2倍の数、すなわち頁数276をこの34年で割ると、1年当たり約8.1頁という数値が出る。これに1頁あたりの行数21を掛けると、1年当たり約170行となる。同様に Or. 4619 写本の 402～436H 年の葉数の2倍の数66を34で割ると約1.9頁という数値が出る。これに1頁あたりの行数25を掛けると、1年あたり約46行となる。よって概算でも Or. 4619 写本は Münich 写本の3分の1弱の長さになる。
- (15) Sibṭ, *Mir'āt*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet III 2907/b: al-Juz' 11, 330～404H.; Ahmet III 2907/b: al-Juz' 12, 405～463H.; Ahmet III 2907/d: al-Juz' 17, 401～450H. Cf. F. E. Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Araştırma Yazmalar Kataloğu*, İstanbul, 1966, Vol. 3, 355-356; Cl. Cahen, “Les chroniques arabes concernant la Syrie, l'Égypte et la Mésopotamie: de la conquête arabe à la conquête ottomane dans les bibliothèques d'Istanbul,” *REI*, Vol. 4, 1936, 339-340. Ahmet/b-11 写本は第11巻で 330～404H 年をカバーしており、Ahmet/b-12 写本は第12巻で 405～463H 年をカバーしている。Ahmet 分類 2907/b で所蔵されており、年代が連続し、書体も同じであることから、同一筆者によるものと考えられる。故に本稿では Ahmet/b-11, 12写本を一つの写本として扱い、引用の典拠を示す場合には、別々に扱っている。ちなみに Ahmet/b-12 写本の f. 201a には

qālā al-Muṣannif—Raḥima-hu Allāh—wa dhakara jaddi fī *al-Muntazam*.....

著者——神が彼に慈悲を与えますように！——曰く、「そしてわが祖父は(その著書)『諸王と諸民族の歴史における秩序』の中で…中略…と述べている。

- とあり、同写本がスィプトの著作であることが証明される。一方、Ahmet 分類 2907/d に所蔵される Ahmet/d-17 写本も 401~450H 年をカバーしている。Ahmet 分類の 3 写本の関係は、筆写年代から Ahmet/d-17 が最も古く (718/1318-19~724/1323-24 年筆写)、Ahmet/b-11, 12 写本は Ahmet/d-17 写本より 100~150 年近く後 (9/15 世紀) に作成されていることから、後者は前者の写しである可能性もある。よって本稿では Ahmet/d-17 を主に使用し、Ahmet/b-11, 12 写本は補助として使用した。現存する *Mir'at* 諸写本が抱える問題点については本稿第 IV 章を参照のこと。なお Ahmet 分類の 3 写本は、カイロにあるアラブ連盟付属の写本研究所在所蔵のマイクロフィルム (Ta'riḫ 4/466) を利用した。Cf. F. Sayyid, *Fihriṣ al-Maḥḫṭūṭāt al-Muṣawwara*, vol. 2, part 1, al-Qāhira, 1954-59, pp. 242-244.
- (16) Sibṭ, *Mir'āt*, Süleymaniye Kütüphanesi, MS Köprülüẓāde 1157: al-Juz' 11, 358~439H. Cf. R. Şeşen, *Catalogue of Manuscripts in the Köprülü Library*, Istanbul, 1986, Vol. 1, 593. なお Köprülüẓāde 写本に関しては、エジプト国立図書館 Dār al-Kutub al-Miṣrīya 所蔵に所蔵されている Köprülüẓāde 写本のマイクロフィルム (*Mir'āt al-Zamān* MS Ta'riḫ 551 写本室備えの目録カードより) を使用したが、混乱を避けるため、本稿では Köprülüẓāde 写本として出典情報を明記する。
- (17) Ahmet/b-11, f. 268b.; Ahmet/d-17, f. 11b.; Köprülüẓāde, p. 329.
- (18) 表 I を見ると、Or. 4619 写本以外は全く同じであることが分かる。一方、Or. 4619 写本は情報が他よりも多い項目があるが、402H 年全体の収録項目は半分以下であり、編纂方針が明らかに異なっていることが分かる。
- (19) Ahmet/d-17, f. 82b.
- (20) Ahmet/d-17, f. 83b.
- (21) Ahmet/b-12, ff. 38b-39a.
- (22) Köprülüẓāde, p. 442. なお同写本の 414H 年の記事は葉の順番が錯綜している。
- (23) Ahmet/b-12, f. 104a.; Ahmet/d-17, f. 172a.
- (24) Köprülüẓāde, p. 551.
- (25) 典拠を示す際の表記については、本稿で使用した各写本とも一定していないようである。例えば、ヒラルルからの引用であることを示す際に、Ibn al-Şābi, Hilāl b. al-Şābi, Hilāl Ibn al-Şābi, Hilāl b. al-Muḥassin al-Şābi など数種類の書き方を使用しており、イブン・アルジャウズィーに「我が祖父」と付記していないことを理由に、判断を保留する必要はないと考える。もしイブン・アルジャウズィーに対して「我が祖父」という文言を記していないことを理由に判断を保留するとなれば、*Mir'āt* とされている Ahmet/b-11, Ahmet/b-12, Ahmet/d-17 写本及び Köprülüẓāde 写本についても、疑いを差し挟む必要が出てくる。
- (26) Cl. Cahen, "IBN al-DJAWZĪ, known as SIBṬ," *Encyclopaedia of Islam, new edition*, Vol. 10, 752; id., "Les chroniques arabes," 339-340.; id., *La Syrie du nord à l'époque des Croisades et la principauté franque d'Antioche*, Paris, 1940, 65.

- (27) *Mir'āt az-Zamān* (A. H. 495-654) by Šams ad-Dīn 'l-Muẓaffar Yūsuf Ben Qizughlā Ben 'Abdallāh commonly known by the surname of Sibṭ Ibn al-Jauzī. A facsimile reproduction of Ms. Landberg 136, ed. with introduction by J. R. Jewett, Chicago, 1907. 筆者未見
- (28) Cahen, “Les chroniques arabes”, 340. ただしカーエンは Evkaf 分類の Vol. 1~12, 15, 18 については (A) に属すとしている。また, Ahmet 分類の諸写本が (A) に属すことについては, シュピース Spies の見解 (筆者未見) によるも, なお考察の余地があるとしている。Cf. O. Spies, *Beiträge zur arabischen Literaturgeschichte*, Leipzig, 1932.
- (29) Li Guo, *Early Mamluk Syrian Historiography: Al-Yūnīnī's Dhayl Mir'āt al-Zamān*, 2 vols., Leiden, 1998.
- (30) Li Guo, *Early Mamluk*, Vol. 1, 208-211. 一覧によると, Ahmet/d 分類の各写本 (Ahmet/d-2, 5, 8, 10, 12, 17, 19) や Bibliothèque Nationale 所蔵 No. 5866 写本 (358~400H 年をカバー) など, 世界各地の図書館に所蔵されている19点の写本が *Mukhtaṣar Mir'āt al-Zamān* ということである。
- (31) Li Guo, *Early Mamluk*, Vol. 1, 16-21, 208-211. Cf. J. Sublet, “al-YŪNĪNĪ”, *EI*, new ed., Vol. 11, 345-346.
- (32) al-Yūnīnī, *Dhayl Mir'āt al-Zamān*, Vol. 1, Ḥaydarābād, 1960, 2, 42.
- (33) 例えば, Cahen, “SIBṬ”, 752 では,

al-Yūnīnī has on the one hand inserted a number of additions (easily recognizable) and on the other hand cut out some lengthy passages (of little importance except when they contained the names of sources)

ユーニーニーは, 容易に識別できる数多くの付加を差し挟むと同時に, 典拠の名前が含まれているものを除いて, あまり重要でないある程度の長さの文章を省く。

とあり, 編者ユーニーニーの追加や削除があったことが指摘されている。しかし, 具体的な事例は紹介されていない。

- (34) ここに挙げた写本の情報は, Cahen, “Les chroniques,” 340; R. Şeşen, *Nawādir al-Makḥṭūtāt al-'Arabīya fī Maktabāt Turkiya*, Vol. 2, Dār al-Kitāb al-Jadīd, Bayrūt, 1975-82, 68-69; id., *Catalogue of Manuscripts in the Köprülü Library*, Vol. 1, 591-593; *Mir'atü'z-Zaman*, ed. A. Sevim, 32; De Slane, *Catalogue des manuscrits arabes de la Bibliothèque Nationale*, Vol. 1, Paris, 1883-1895, 286-287; H. Derenbourg, *Les manuscrits arabes de la collection Schefer—à la Bibliothèque Nationale*, Paris, 1901, 14; G. Vajda, *Index général des manuscrits arabes musulmans de la Bibliothèque Nationale de Paris*, Paris, 1953, 481; Ibn al-Qalānisī, *Dhayl*, ed., Amedroz, 8. 等を参照した。

表 I 402 H 年の記述内容

Münich	Ahmet/ b-11	Ahmet/ d-17	Köprülüzade	Or. 4619
アーシューラー祭における様々な行為の許可	○	○	○	○
ファフル・アルムルクによるイクター追認	○	○	○	
ファフル・アルムルクによるウカイル族討伐遠征	○	○	○	
カーディルによるファーティマ朝の血統否認の宣言書発布	○	○	○	
ファフル・アルムルクによるクライシュ家の墓地等への喜捨	○	○	○	○+
強風によりナツメヤシの木が倒された事件	○	○	○	○
ガズナのマフムードからの書簡の到来	○	○	○	○
アブー・アルフサインとイブン・マクラーの間の驚くべき出来事	○	○	○	
巡礼に関する出来事	○	○	○	○
アレppoを巡るファーティマ朝とミルダース朝の角逐	○	○	○	
死亡録 アフマド・ブン・アブドアッラー・アルスーサンジャルディー	○	○	○	
アフマド・ブン・マルワーン・ムマッヒド・アッダウラ	○	○	○	
ウスマーン・ブン・イーサー・アルバーキラニー	○	○	○	○
アリー・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド	○	○	○	
アリー・ブン・ダーウード・アルカッターン	○	○	○	○+
ムハンマド・ブン・アフマド・アルガッサニー	○	○	○	

○は München 写本との情報一致。+は情報内容に追加あり。